

いわかづみ

令和五年三月 第九二号

- ◇ 村の景観と歴史・人物(11)
- ◇ 民具が語る生活史(民具(19)人形)
- ◇ 方言一考(ちよす)
- ◇ モノ言うもの(化石)
- ◇ 歴史館行事の報告・お知らせ

村の景観と歴史・人物(11)

峠を越えた人たち②

万里小路藤房

渡辺 伸 栄

万里小路藤房(までのこうじ・ふじふさ)

本名は藤原藤房。後醍醐天皇の側近で、中納言。第一級の上流貴族。京の万里小路に邸宅があったので、こう呼ばれた。

後醍醐天皇の建武の新政(一三三四年)で、政権の中枢にいた人物。漫談の綾小路とはまったく無関係。(念のため)

このような高貴な重要人物が、どういう因果縁で、関川村の峠を越えた人になるのか。とても不思議な物語。

秋田市・補陀寺の伝説

藤房は後醍醐天皇の政治に直言し、それを聞き入れてもらえず職を辞した。京の片隅に隠棲した後、歴史から姿を消したことになる。

ところが、突然、出羽の国・秋田に姿を現す。

秋田市に補陀寺という古刹がある。その第二世住職・無等良雄が実は、藤原藤房だという伝説があるという。

藤房は京で隠遁の後、越後の国に移り、ここで月泉和尚の弟子になって名を改め、師と共に秋田へ来て補陀寺を建立。師の後を継ぎ住職になったのだと。墓も現存するという。確証はなく、あくまでも伝説伝承。

ここまでのことは、ネットを検索すれば、多くの情報が載っている。さてさて、ここからが本論本題。

古道・名倉道

安角と沼の間、丸山(三九六m)と葡萄鼻山(七九八m)に挟まれたゆるやかな低山地帯の中に、古くからの道があった。その中間点、

標高三〇〇mほどの峠の下、小綱木川の川辺に今はただ草藪の小さな平地。そこに、かつて人家があつて、地名が名倉。

それで、この道を名倉道という。

名倉道は、沼―安角―鮎谷―幾地―大長谷とつながる道。本紙前号で紹介した米沢街道のショートカット・ルート。



名倉道

江戸幕府は、大島・下関・上関に米沢街道の宿場を置き、荷物継送りの本道と定めた。宿場の経済を支えるため、宿場継送りを逃れる間道の荷運びを禁止した。

よって出羽内陸へのメインルートは、関を通る街道になった。が、ただ歩くだけなら名倉道の方が短い。江戸時代以前であればなお、奥羽へ急ぐ旅人には活用された道だったはず。

名倉観音

名倉の近く山中に、根元が洞窟になった巨大な岩が鎮座している。岩窟には、以前、馬頭観音が祀られ、「名倉観音」と称されて信仰を集めていたという。

その由緒に、万里小路藤房が登場する。

この観音様は、旅の途中の藤房が、旅人の安全を祈って建てたものなのだ。

この話を、二〇一〇年歴史館古道探索の現地で、講師の横山征平さんから聞いた。

その後、新潟県教育委員会発行の小冊子「会津街道・米沢街道」の中に、高橋重右エ門さんが、そのことを書いているのを見つけた。

この冊子、発行は一九九七年。ちょうど私が県庁に入った年。編集の文化行政課は、私的のいた課の真上の階。あの時あの頃、頭の上

に藤房卿が登場していたと思えば、奇しき縁というべきか。それはまあ、さておくとして。

藤房の越えた峠

補陀寺と名倉の伝承をつなげれば、推論の帰結は明らか。

万里小路藤房は、師の月泉和尚と共に名倉道を通って出羽へ抜けた。ということになる。では、沼から先の羽越国境越えルートは？

藤房の当時、大里峠はまだない。沼からは茅峠越えの道になる。

若ぶな高原を越えて一旦荒谷沢へ下り、沢底から茅峠に登り返して金丸へ下る。そこから八ツ口、そして田代峠を越えて小渡に下り、小国盆地へ。とまあ、こんなルートになる。

現代の私たちから見れば、なんとも大変な道と思う。がしかし、当時はその道しかなく、また、皆がその道を歩いているとなれば、ごく当然のこととして歩いていただろう。

洞窟に響くは、観音経か祝詞か

十三年前に訪れた時、洞窟の観音様はすでに不在だった。

ある人の夢枕に名倉観音が現れて、麓へ連れて行けーとお告げ。それで、その人、観音様を負ぶって自分の村へ連れ帰った。江戸

時代の頃の話だとか。

洞窟には、観音の身代わりか山の神が祀ってあった。

それから九年後、二〇一九年の歴史館行事で再び名倉道へ。同行の平田大六さんが、洞窟で呟いた。「観音様なら観音経を上げるつもりだったが、山の神なら祝詞にしよか」。不思議な力が湧くという観音経「念彼観音力（ねんぴかんのんりき）。さてこそ大六氏の底知れぬパワーの根源か。代わって岩窟に響いた祝詞。

七百年続く神仏両用パワースポット。



名倉観音洞窟 2019.9.28 歴史館古道探索会

まもなく月遅れの節句があります。この時期、毎年渡邊邸ではひな人形を飾り、見学者の目を楽しませています。箱書きによると、このひな人形は安政5（一八五八）年のもので、五人囃子なども同時期に求めたのではないかと考えられています。（写真1） 時代は幕末へ向かう世情不安のころ、渡邊三左衛門家は幕府や米沢藩に多額の出費を嵩ね、多くの土地を質に入れます。決して飛ぶ鳥を落とすような勢いの時期ではなかったのですが、9代善一（よしかず）は長女順の初節句のためにこのような立派なひな飾りを求めたようです。

余談ですが、長じて順さんは、上関の新桂屋渡辺羊太郎氏へ嫁いでおられます。嫁いでも実家のひな人形をご覧になられたかなあ、お子さん方に「あのひな飾りはわたしの節句に…」などと語っておられたかしら、と順さんの人生を想像しています。（写真1）



では、関川村の一般家庭のひな飾りはどうであったかという点、飾られたものの多くは土人形でした。伏見人形、博多人形、「猫に鯛」が人気の米沢の相良人形もすべて土人形ですが、関川村に流通したものは旧神林村松沢の大浜（おおはま）人形が多かったようです。大浜人形は、村上藩の御用職人として三河の大浜から来た瓦工が伝えたのがその始まりとされています。男女関係なく初節句に合わせて用意するものだったそうで、お子さんの名前が記されている物もあります。種類は、加藤清正、菅原道真、金太郎、桃太郎、藤娘、七福神、三番叟（さんばそう）、大石内蔵助、お多福、と様々です。（写真2） いずれも子の健やかな成長を願い、用意され、飾られてきました。

そもそもひな人形は、中国の「上巳の節句」・平安時代に災厄を人の代わりに人形（ひとかた）・形代（かたしろ）に移して川に流す風習・宮中の「ひいな遊び」などが合わさってきたものです。人形（ひとかた）・形代（かたしろ）などは聞き覚えがないかもしれませんが、「千と千尋の神隠し」に出てくる紙の鳥のようなものがそれにあたります。今でも神社の夏越（なごし）の祓いや大祓いの式で用いられます。紫式部の『源氏物語』に光源氏が須磨の海に人形を流す場面があります。よかったら探してみてください。



写真2

人形を「流して厄を払うもの」から、「大切に飾ることで子の健やかな成長を願う」厄を祓うものへとその捉えを変化させていった結果、いまのようなひな飾りの形が定着していきましました。昭和30年代には「人形供養」という新しい習俗が生まれ、現代にも伝わっています。私たちが人形に特別な感情を抱くのは、古代から脈々と伝わってきた日本人の感性なのかもしれません。

お隣の村上市をはじめ、各地でひな飾りを用いた町おこしが試みられています。各地のひな飾りを楽しみながら、家に伝わるひな人形・土人形を、改めて眺めてみませんか。（田村舞子）

参考文献 民具学会編「一九九七「人形」「雛人形」『日本民具辞典』ぎょうせい出版、佐久間惇一・石井中・矢部キヨ編「おひな様」一九八六『関川郷の民俗』関川村教育委員会

方言一考・ちよす

新潟県全域に広く「ちよす」は使われているようです。触る、を意味する方言ですが、似たような音で似たような意味を持つ標準語の無い、独特な言葉です。「おれちよの化石、ちよすなよ」と言えば「私の化石に触らないで」となります。この「ちよす」が発展すると「ちよしこもっこ」となり「触る」を強めた「いじる」の意味になります。「んめ、ちよしこもっこしたさん、おれちよの化石、ほいし、ぼっこれでしもだ」＝「あなたがあんまりむやみにいじくり回すから私の大事なムカシニッケイの化石が壊れてしまったわ」

言葉は使われないと、やがて死語となります。言葉の博物館はないので保存もできません。是非「ちよす」を使って、未来につなげてください。「ちよす」からの切実な希望です。(安久)



ちよしこもっこされてぼっこれたムカシニッケイの化石(荒川台で発見された、約1500万年前のクスノキ科の植物。人類の祖先アウストラロピテクスがアフリカに誕生するのはこの1000万年後である)

モノ言つもの・化石の話

佐藤貞治先生(令和二年没・享年八十六)は高校教師としてはうだつのあがらない現役生活を送ったのだろうが、地質学者としては名のある方だった。それ故、第二代の歴史館長となると様々な館外活動を始めた。古道歩き、山城探索、巨木探索など、美術館巡りやこの会報誌も同様である。特に専門の地質学では化石探しが得意で、子供達が探して持ってくる貝や蟹などの化石をどかかと座って待っている。そしてこれは何百万年前のなんとかだと、適当おおざっぱに鑑定していれば良かったからだ。地層の露出した斜面をツルハシで掘るのはボランティアのI氏とK氏。二人が掘り崩した岩石を子供達が金槌で割って化石を探す流れだが、この崖を掘る作業が結構な労働らしく、疲れてくると自分で掘った石を拾って、知りもしないのにこれはなんとかという化石だとか言い始める。これを見張るのが私の仕事で「あなた方はただ掘ってればいいんだ」と注意する。場所によっては水気が多く、ツルハシを振り下ろす度に泥水が飛んで、彼らの顔も衣服も泥だらけになっていくのだが、そういう時は少し離れた所で声をかける。そうして見つけた化石が当館には多数あり、人類がこの地球に出現する前、ここが海の底だったことを語り、子供達の歓声と泥にまみれたボランティアの姿を彷彿させるのだ。(安久)

歴史館行事の報告

○山と花のスライド解説会 1月15日(日)、参加者二十八名でした。

○民具体験実施 2月22日(水)、関川小学校3年生が「昔の道具調べ」学習に来館しました。ボランティアスタッフのみなさん、ありがとうございました。その時の様子や感想をエントランスホールに展示しています。

○古文書解読講座(1月～3月) 江戸時代の文書(宗門人別帳へ記すための為取替文書、借用文書、「博奕をしません!」という小見村・上山山村・滝原村三か村の誓いなど)を読んでいます。

お知らせ



○村民ギャラリー「歴史館所蔵絵画展」 小野末・長谷部権次呂・坂井初雪・三品優などの作品、15点を展示しています。会期：5月7日(日)です。観覧は無料です。

○令和5年度友の会会員募集のお知らせ 令和4年度の友の会にご加入ありがとうございました。令和5年度の行事・予定は同封いたしました。会員募集の紙をご覧ください。よかったらよろしく願います!

いわかがみ 第九二号

発行日 令和五年三月

編集発行 せきかわ歴史とみちの館

tel0254-64-1288 Fax0254-64-0300